

博 多 167

— 博多遺跡群第211次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1396集



2020

福岡市教育委員会

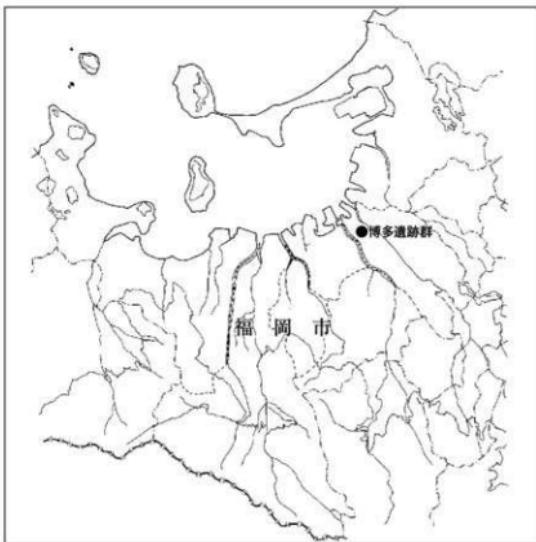
はか

た

博 多 167

— 博多遺跡群第211次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1396集



調査番号 1701
遺跡略号 HKT-211

2020

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えていた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書は、ホテル建設に伴う博多遺跡群第211次発掘調査について報告するものです。博多遺跡群は中世の国際貿易都市として知られており、今回の調査でもそれを裏付けるような多くの貿易陶磁器をはじめ、都市生活の痕跡を示す数多くの文化財が発掘されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきましたKFT株式会社様をはじめ、関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例　　言

- 本書は、福岡市博多区店屋町184番1、184番2、184番3、184番4、184番5のホテル建設に伴い、福岡市教育委員会が2017（平成29）年4月3日から6月30日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第211次調査の報告書である。
- 遺構の呼称は記号化し、溝→S D、井戸→S E、土坑→S K、ピット→S P、その他→S Xとした。遺構番号はピットを除き、種類に関係なく連番とした。ピットは別に番号を付けた。
- 本書に使用した遺構実測図は野村俊之、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は林田憲三、平川敬治、元田晃子、山本麻里子が作成した。また、製図には篠田千恵子、増永好美、本田浩二郎、田上があたった。
- 本書に使用した写真は田上が撮影した。
- 本書に使用した標高は海拔高である。
- 本書に使用した方位は座標北である。
- 出土した陶磁器の分類は白磁については、森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究NO.2』、青磁については、上田秀夫1982「14～16世紀の青磁の分類」『同』、青花については小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『同』（ただし、染付を青花に読み替え）による。
- 本書の編集・執筆は田上が行った。
- 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	1701			遺跡略号	HKT-211
調査地地籍	博多区店屋町184番1～5			分布地図番号	天神 49
開発面積	313.04m ²	調査対象面積	240m ²	調査面積	174m ²
調査期間	2017（平成29）年4月3日～6月30日				

目 次

I	はじめに	1
1.	調査にいたる経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	調査地点の立地と環境	2
II	調査の記録	4
1.	調査の経過と概要	4
2.	基本層序と調査面	4
3.	第1面の遺構と遺物	6
	SE 104	8
	SX 109	9
	SK 124	10
	SK 128	10
	SE 142	10
	SX 146	10
	SK 150・SX 151・SX 152・SX 153	12
	第1面その他の遺物	15
4.	第2面の遺構と遺物	18
	SK 204	20
	SK 210	20
	SX 253	21
	SX 255	22
	SE 256	22
	SK 260	24
	SE 261	25
	第2面その他の遺物	27
5.	第3面の遺構と遺物	28
	SK 301	30
	SK 304	31
	SX 309	31
	SK 310	32
	SK 311	32
	SK 312	33
	SK 314	33
	SK 317	34
	SK 319	34
	SK 322	34

第3面その他の遺物	34
6. 第4面の構造と遺物	36
SE 401	38
SK 402	38
SK 409	38
第4面その他の遺物	39
7. その他の出土遺物	40
陶磁器	40
土製品	40
石製品	40
金屬製品	41
ガラス製品	41
錢貨	42
Ⅲ　まとめ	42

I　はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は2017（平成29）年1月20日付けて、KFT株式会社より、福岡市博多区店屋町184番1、184番2、184番3、184番4、184番5におけるホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を受理した。

これを受けた経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係では、申請地が博多遺跡群の範囲内であることから確認調査が必要と判断した。確認調査は2月8日に実施し、現地表下1.7mで中世後半期の遺物を含む層を確認した。

確認調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、建築工事によって影響がある部分を対象に本調査を実施することで合意した。

その後、2017（平成29）年3月27日付けてKFT株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月3日より6月30日まで発掘調査を実施し、2018・2019（平成30・31・令和元）年度に資料整理および報告書作成を行った。

2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 KFT株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成29年度、資料整理：平成30・31・令和元年度）

調査総括 福岡市経済観光文化局文化財部（30年度より文化財活用部）

埋蔵文化財課	課長	常松 幹雄（29年度）
		大庭 康時（30年度）
		菅波 正人（31・令和元年度）
	調査第1係長	吉武 学
庶務 文化財保護課	管理調整係長	藤 克己（29年度）
	管理調整係	松尾 智仁（29年度）
文化財活用課	管理調整係長	藤 克己（31・令和元年度）
		松原加奈枝（31・令和元年度）
事前審査 埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎
	事前審査係主任文化財主事	池田 祐司（29年度）
	事前審査係文化財主事	田上勇一郎（30・31・令和元年度）
		中尾 祐太（29・30年度）
		朝岡 俊也（30・31・令和元年度）
調査担当 埋蔵文化財課	調査第1係主任文化財主事	田上勇一郎（29年度）
整理担当 埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎（30・31・令和元年度）

3. 調査地点の立地と環境

博多遺跡群は玄界灘に面する博多湾岸の砂丘上に位置する遺跡である。玄界灘を渡ると朝鮮半島、さらにその向こうには中国大陆があり、日本の中でもっとも大陸に近い地域にある。その立地から、古くから大陸の影響を受けてきた。特に古代から中世にかけては国際貿易都市として発展し、出土する遺物も国際色豊かなものである。大量の中国からの輸入陶磁器は国内に類を見ない。また、朝鮮、タイ、ベトナムなどからもたらされた陶磁器類も目を引くところである。

博多遺跡群が立地する砂丘は、現地表の微地形やボーリング調査、埋蔵文化財発掘調査などにより、海岸線に沿って3列並んでいることがわかつてき。一番海寄りは「息浜」と呼ばれる。陸地化するのは比較的遅かったようで、おもに12世紀後半以降都市化が進んだ。陸地側2列は「博多浜」と呼称している。南側では弥生時代前期から生活痕跡が認められ、現在柳田神社が位置する周辺では11世紀後半からは国際貿易港として港湾施設や中国商人の屋敷や店舗が立ち並んでいた様子が発掘調査により明らかになっている。

息浜と博多浜の砂丘は11世紀後半頃中央部でつながり、両側は海が湧入していた。西側の入り江は中世後期には楊ヶ池と呼ばれる湿地となっていた。その後埋め立てで入海は縮小し、町場が徐々に広がっていく。

戦国時代には永禄2（1559）年筑紫惟門の焼き討ち、天正8（1580）年龍造寺氏の焼き討ちなどで焦土と化し、天正14（1586）年には薩摩の島津氏の侵攻を受けた。島津氏を追って博多に入った豊臣秀吉は太閤町割を行い碁盤目状の新たな街区が形成された。

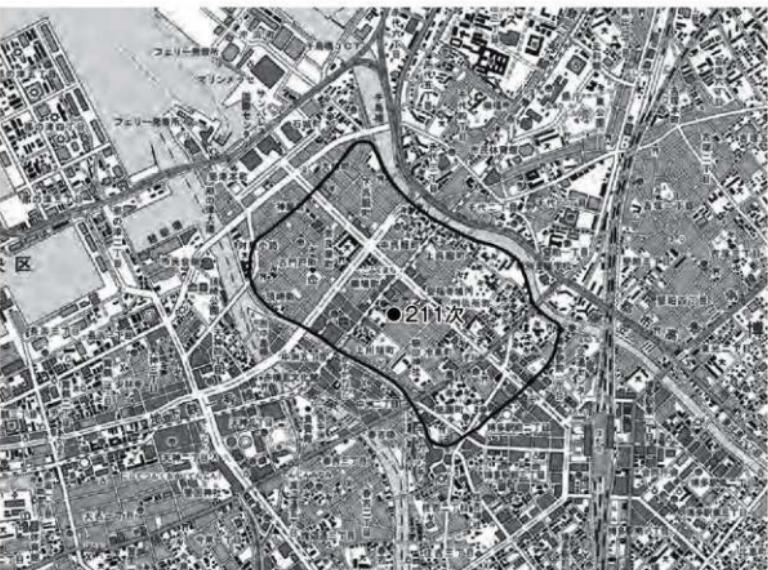


Fig. 1 博多遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

今回調査を行った211次地点は博多浜の北西部に位置し、楊ヶ池に面している。標高は4.6mで、北東に向かって緩やかに下っている。

これまで周辺では幾度かの調査が行われている。

西側では124次、207次調査が行われ、16世紀の側溝がある南北方向の道路が確認された。また、124次調査では陶磁器136点と金属製品6点を整然と並べ、埋納した遺構が発見された。戦国時代の混乱を避けるために埋納されたものと考えられる。

南側の159次調査では14世紀代から遺構が認められ、16世紀前半代の南北方向の道路が発見されている。

西側では61次調査が行われており、13世紀中頃から16世紀末の遺構が検出された。14世紀代の礎を充填した建物基礎や領製品の鋳造遺構、鋳型、坩堝、鑄の泪口が検出されている。

周辺の調査では基盤の砂丘砂は確認されておらず、13世紀中頃に東側から堆積や埋め立てで陸地化し、都市に組み込まれていく様子が認められる。

近年では北側で234次、南側で238次調査が行われている。

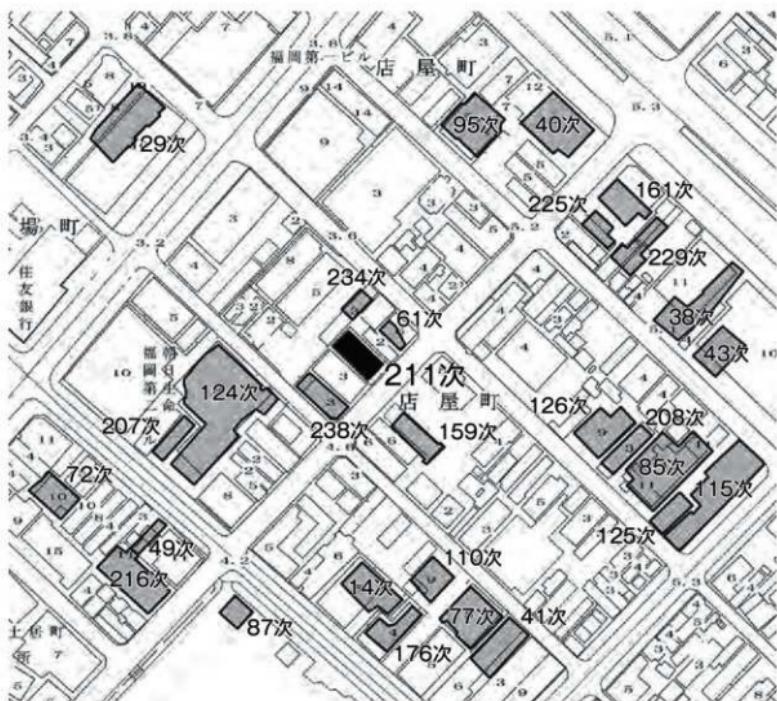


Fig. 2 調査地点の位置と周辺の調査地点 (1/2,000)

II 調査の記録

1. 調査の経過と概要

調査区は鋼矢板で囲まれた建物予定部分である。調査に入る前に施工者により約2m掘取りが行われ、排土は場外搬出された。

2017（平成29）年4月3日に機材の搬入を行い、4月4日より作業員による発掘調査を開始した。調査で発生する排土置き場を確保するため、東西2分割で調査を行った。調査のための掘削は安全のため鋼矢板から1m程度引きを取って行った。測量用グリッドは敷地にあわせ2m四方に設定し、アルファベットと数字で位置を示した。まず、東半から調査を開始し、第4面まで調査した。第1面と2面では東寄り約2m幅に整地面が見られた。南北方向の道路跡と考えられる。第3面は道路整地面を取り除いた面で、第4面は埋め立て土を除去した自然堆積土の上面で遺構検出を行った。6月2日に排土を反転し、6月5日から西側の調査を開始した。東側の調査面に合わせて4面の調査を行ったが、調査区の接合面で遺構の形状にズレが生じてしまった。6月30日に調査を終了、機材を撤収した。

2. 基本層序と調査面

調査区東壁の土層図を作成しているが、上部に道路とみられる細かい整地が認められる。西側では対応する整地面が見られないため、層序は調査区内でも異なっている。

基本的には標高2.2mまでが近世の土層で、32層の整地面を第1面の調査面とした。33層も整地層であり、合わせて50cmほどの厚みがある。整地層中に第2面を設定し、整地層を除去したところを第3面とした。第3面の下は40cm程度の灰褐色の砂質土など（37～39層）があり、埋め立て土と思われる。埋め立て土の下で第4面を設定した。第4面の下は自然堆積とみられる粗砂の層やシルト層、粘土層など（40～55層）が南から堆積する。標高0.4mで海成砂とみられる灰色粗砂層（56層）に達し湧水する。

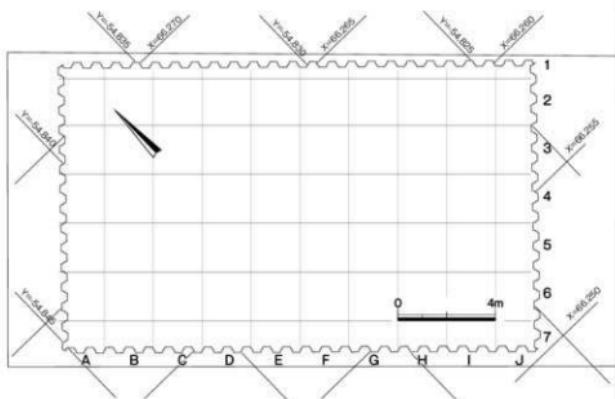


Fig. 3 調査区域図 (1/200)

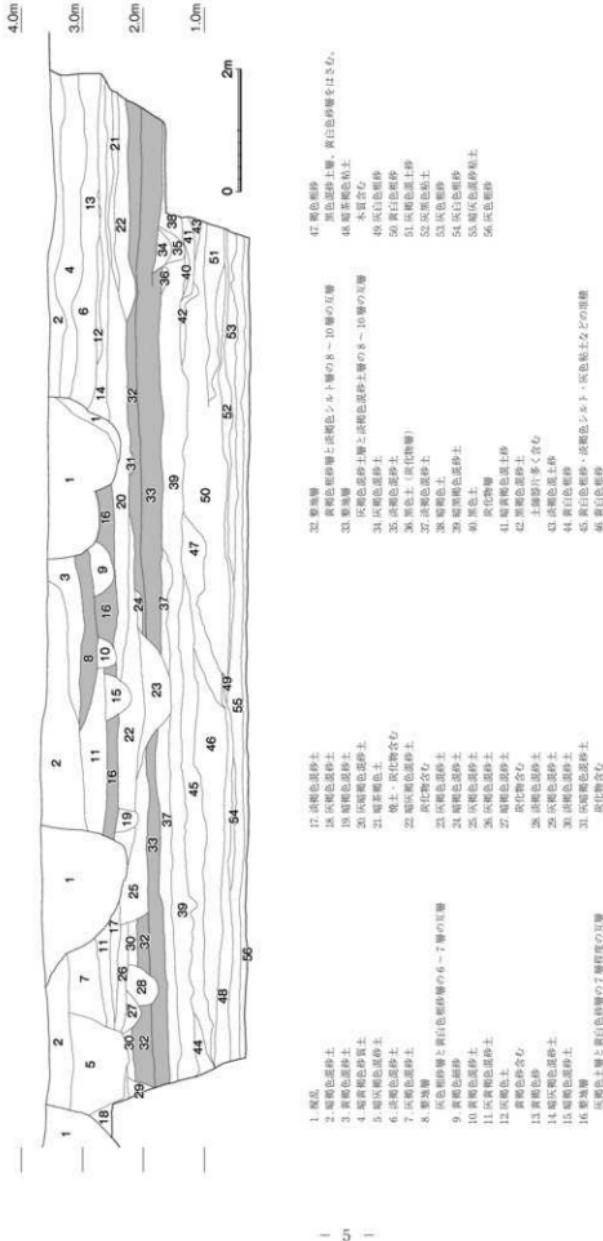


Fig. 4 調査区東壁土層 (1/80)

3. 第1面の遺構と遺物

第1面は調査区東際で発見した整地面の高さを検出面とした。標高は2.2m～2.4mである。近・現代の搅乱や近世の井戸が多いが、16世紀後半代の遺構が検出されている。調査区東側には細かい整地層が南北方向に延びている。側溝などは認められないが道路跡であろう。



Ph. 1 第1面東側全景（西から）



Ph. 2 第1面西側全景（西から）

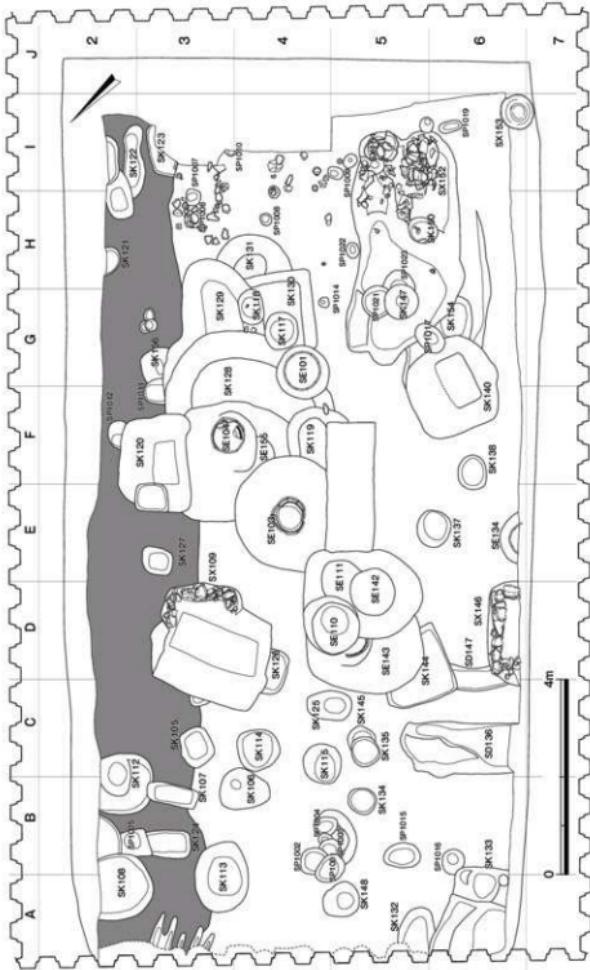


Fig. 5 第1面遺構分布図 (1/100)

SE 104 (Fig. 6・7, Ph. 3・4)

F-3・4に位置する瓦組の井戸である。北側はSE 103やSK 120に切られている。掘方径は2.5m程度である。瓦が3段残り、水溜めに木桶を据える。木桶の径は70cm。井側の痕跡が確認面まで残り、備前焼の擂鉢が廃棄されている。井戸瓦は厚みがある大ぶりのもので、井側の円周のカーブよりも緩い湾曲をしている。

出土遺物をFig. 7に示す。1～10が掘方出土、11が井戸枠内の遺物。**1**は土師器の小皿。口縁に油煙が付着しており、灯明皿として使用されている。**2**は龍泉窯系青磁碗で外面に細蓮弁を施すB-IV類。**3～5**は景德鎮の青花碗。**3**は口縁外反のB-2群。**5**はE群の碗。**6**は華南産の青花碗。厚い釉がかかるが、かけムラがあり一部露胎部分がある。**7・8**は景德鎮の青花皿B-1群。**9**は景德鎮の青花杯。**10**は朝鮮王朝灰青陶器の碗。**11**は備前焼擂鉢である。放射状の直線摺目に加え斜め方向の摺目が施される。また、内底にも摺目がある。

出土遺物から16世紀末の井戸と考えられる。

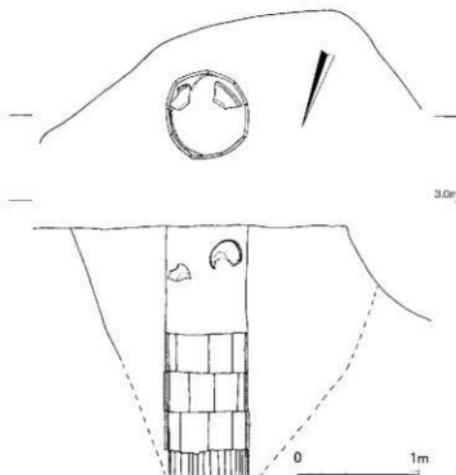


Fig. 6 SE 104 実測図 (1/40)



Ph. 3 SE 104 遺物出土状況 (北から)



Ph. 4 SE 104 井側検出状況 (北から)

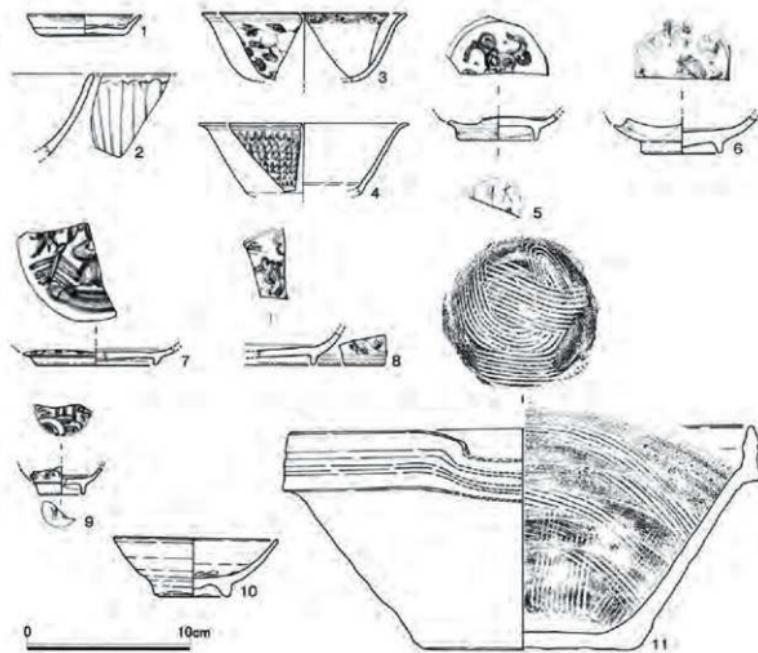


Fig. 7 SE 104 出土遺物実測図 (1/3)

S X 109 (Fig. 8, Ph. 5)

D - 3 に位置する石組土坑である。搅乱により北側大部分が失われている。東西方向の石組の内法は1.0mである。



Ph. 5 SX 109 検出状況（西から）

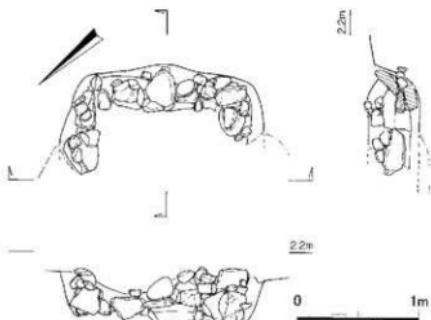


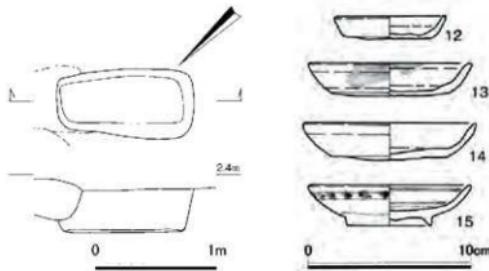
Fig. 8 SX 109 実測図 (1/40)

SK 124 (Fig. 9・10)

B - 3 に位置する長方形土坑。東側を S P 1 0 0 5 に切られる。長辺1.1m、短辺0.6m、深さ35cm。

出土遺物を Fig. 9 に示す。12は土師器の小皿。13・14は土師器の壺。15は華南産の青花皿。内底と外底を露胎とする。

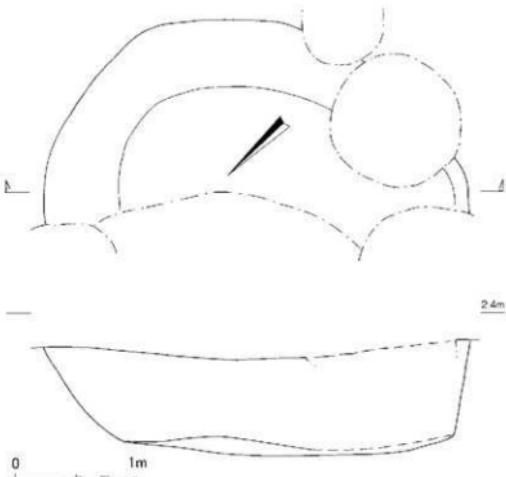
出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



SK 128 (Fig. 11・12)

F・G - 3・4 に位置する円形土坑。残存部の径は3.5m、深さ80cm。北側を S E 1 0 4・S K 1 1 9、南側を S E 1 0 1・S K 1 1 7 に切られている。

出土遺物を Fig. 12 に示す。16は土師器の小皿。17～19は土師器の壺。20は龍泉窯系青磁碗で外面口縁に雷文を施す C-II類。S K 1 3 0・S K 4 0 3 出土遺物と接合する。もともとは4面の S K 4 0 3 の遺物であろう。21は瓦質の釜。内面上部三分の二から外面鉄までミガキ、他はハケ調整である。



S E 1 4 2 (Fig. 13・14)

D・E - 5 に位置する近世の素掘りの井戸である。東側は試掘トレンチで失われている。残存部の掘方径は1.8mである。出土遺物を Fig. 14 に示す。22・23はベトナム鉄絵の碗。印版で文様を入れる。軸下に化粧土が認められる。



S X 1 4 6 (Fig. 15, Ph. 6)

D - 6 に位置する石組土坑である。西側は調査区外に延びる。南北方向の石組の内法は1.0mである。

Ph. 6 S X 1 4 6 検出状況 (南から)

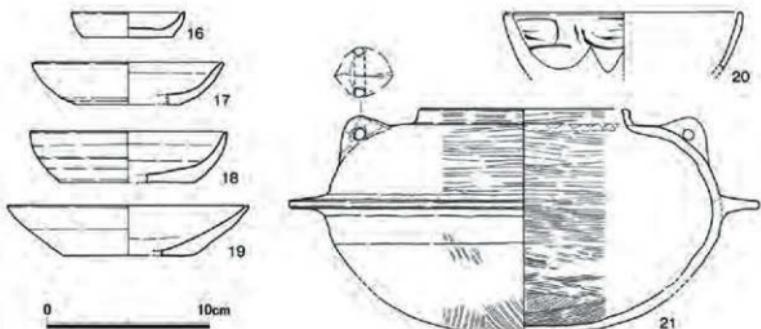


Fig.12 SK 128出土遺物実測図 (1/3)

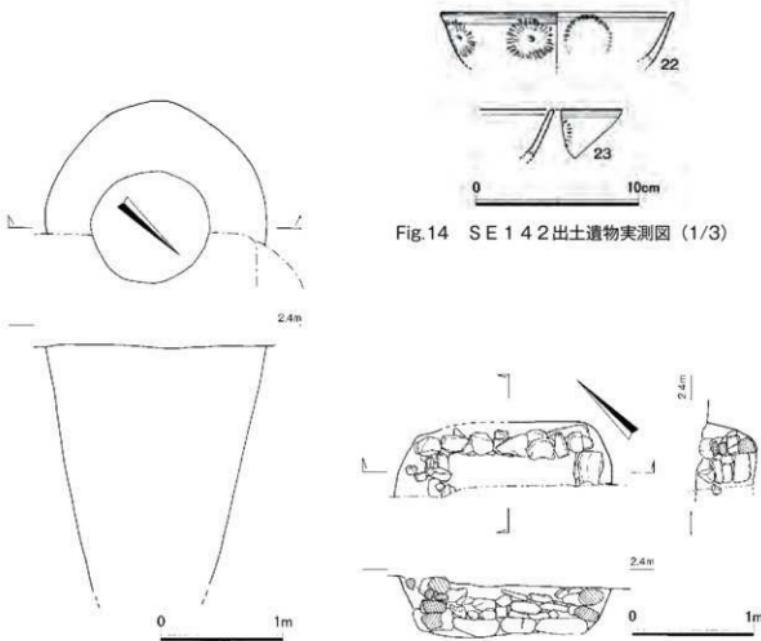


Fig.13 SE 142実測図 (1/40)

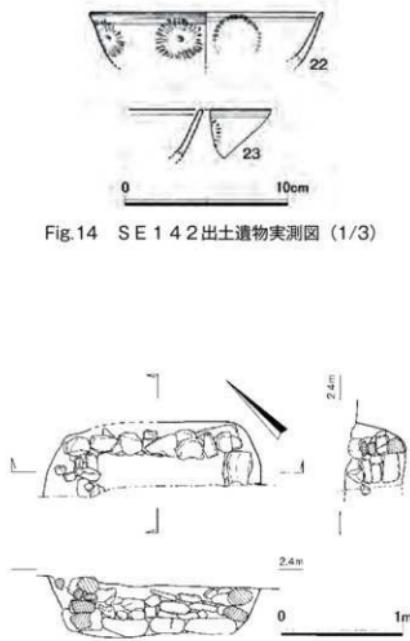


Fig.14 SE 142出土遺物実測図 (1/3)

**SK150・SX151・152・
153 (Fig.16~19, Ph. 7~9)**

SK150はG～I-5・6に位置する略椭円形土坑である。長辺4.9m、短辺2.0m、深さ30cmである。南側に備前焼の大甕が2個据えられており、東側をSX151、西側をSX152とした。いずれも上部は破片となり北側に広がり、底部のみ原位置を保っている。SX151の甕底部には大きな扁平碟が4点ほど投げ込まれている。

SX153はI-6・7、発掘区南西隅に位置する備前焼の大甕が据えられた遺構である。SX152から南西2mに位置する。体部の上位まで原位置を保っていた。SX151・152に比べ底部が25cm高い位置にある。

SK150の出土遺物をFig.18に示す。24は景德鎮の白磁皿E-2b類。25は景德鎮の青花碗C群。26は瓦質土器の擂鉢である。

SX151・152・153の出土遺物をFig.19に示す。27はSX151に据えられていた備前焼甕である。28はSX152に据えられていた備前焼甕でかなり歪んでいる。29はSX153に据えられて

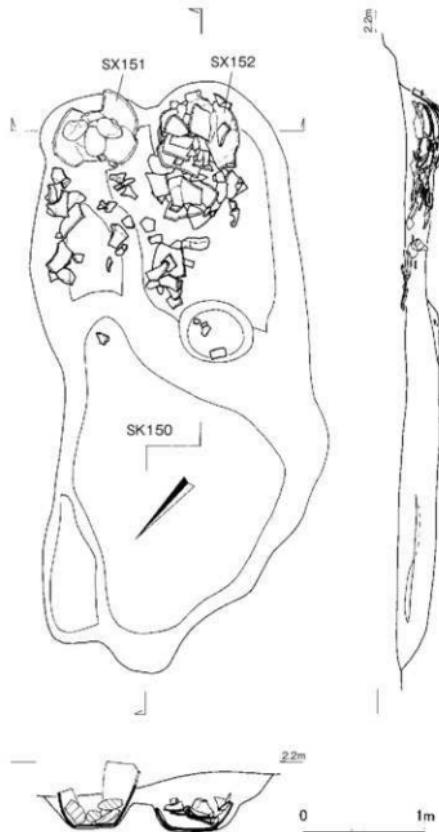


Fig.16 SK150・SX151・152実測図 (1/40)



Ph.7 SK150検出状況（北から）



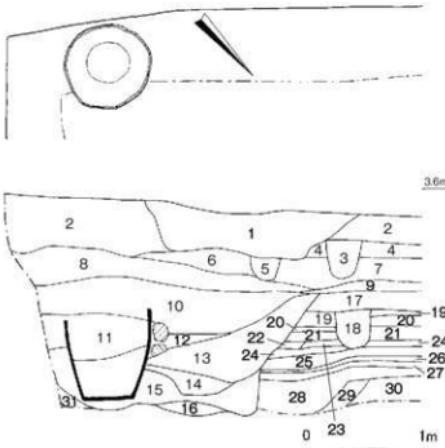
Ph.8 SX151・152検出状況
(北から)



Ph.6
SX 153検出状況（東から）

いた備前焼甕。体部上部に「二石入」のヘラ書きがある。30～38はSX 153周辺出土で32～35は甕29の中から出土した遺物である。30～34は華南産青花の高台付皿。30・31・33は内底の釉を搔き取る。32は外底を露胎とする。34は内底の釉を輪状に搔き取り、外底を露胎とする。35は華南産青花の基筒底の皿。体部下半を露胎とし、内底の釉を輪状に搔き取る。36・37は華南産青花の皿。残存していないが高台が付くであろう。38は朝鮮王朝灰陶器の碗。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. 植生 | 17. 灰褐色土 燥土塊・炭化物多く含む |
| 2. 灰褐色砂質土 | 18. 灰褐色土 燥土・炭化物含む |
| 3. 灰褐色砂質土 | 19. 灰褐色土 燥土・炭化物含む |
| 4. 灰褐色土（豊地層） | 20. 灰褐色砂質土 燥土塊多く含む |
| 5. 灰褐色砂質土 | 21. 灰褐色砂質土 |
| 6. 灰褐色砂質土 | 22. 灰褐色色シルト |
| 7. 淡褐色・黄白色細砂の互層（4層程度） | 23. 黄褐色土 下部燥土・炭化物多く含む |
| 8. 黄褐色砂 | 24. 黄褐色土シルト |
| 9. 灰褐色土 燥土・炭化物含む | 25. 灰褐色土 燥土・炭化物多く含む |
| 10. 菊茶褐色土 燥土塊・炭化物非常に多く含む | 26. 菊茶褐色粘質土 燥土・炭化物含む |
| 11. 菊茶褐色土 燥土塊・炭化物非常に多く含む | 27. 灰褐色粘土・暗黃褐色細砂 |
| 12. 灰褐色土 炭化物多く含む | 28. 灰褐色土 燥土・下部炭化物層 |
| 13. 菊茶褐色土 燥土塊・炭化物多く含む | 29. 灰褐色泥質土 |
| 14. 菊茶褐色土 燥土塊・炭化物非常に多く含む | 30. 灰褐色土 黄褐色細砂・炭化物層の互層（3層以上） |
| 15. 灰褐色土 燥土・炭化物含む | 31. 灰白色シルト |
| 16. 灰褐色土 燥土塊・炭化物含む | |

Fig.17 SX 153実測図・土層図（1/40）

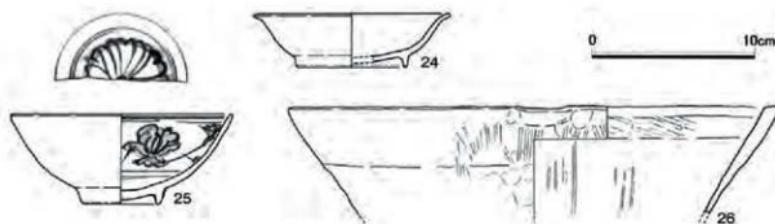


Fig.18 SK 150出土遺物実測図（1/3）

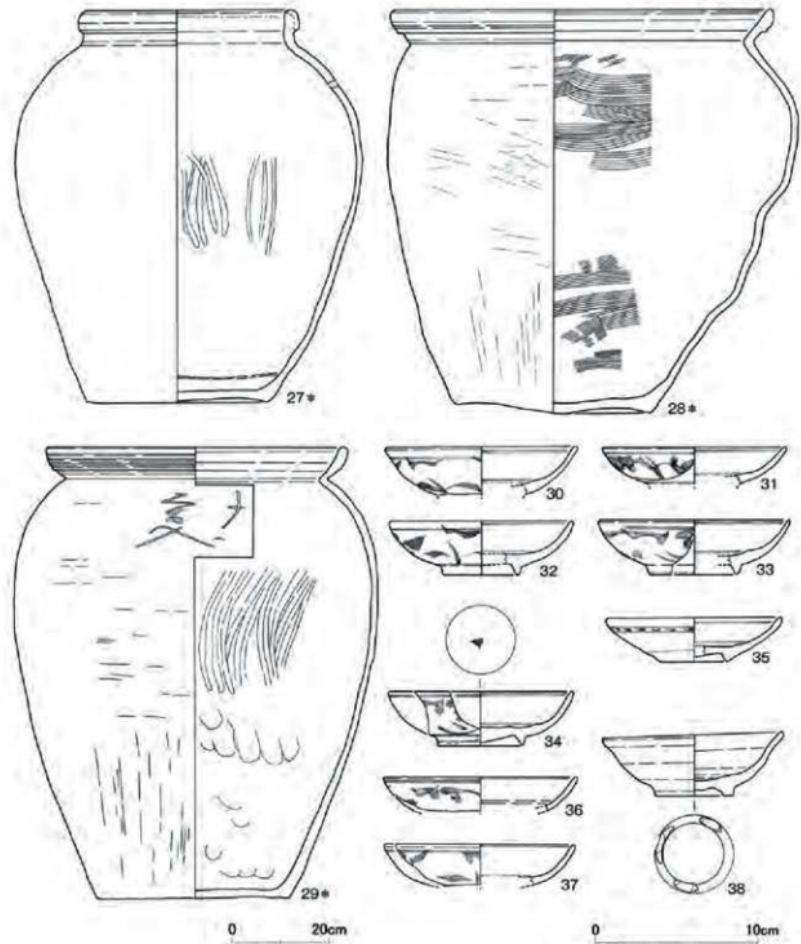


Fig.19 SX 151・152・153出土遺物実測図 (1/3・1/10*)

第1面その他の遺物 (Fig.20~22, Ph.10)

Fig.20はこれまで取り上げなかった第1面遺構の出土遺物である。39は近世井戸SE103出土の龍泉窯系青磁碗B-IV類である。外面に細蓮弁を施し、内底に花文を印花する。外底の釉を蛇の目に搔き取る。40はSK131出土の口縁部外反する景德鎮青花碗B-2群。41はSK105出土の華南産の青花碗である。内底と外底を露胎とする。釉は青色味を帯び、白濁する。大きな貫入が入る。42はSE103掘り方出土の景德鎮青花皿B-1群である。内底に玉取獅子、外面に蓮華文を描く。43はSP1015出土の景德鎮青花皿E群である。内底に獅子を描く。44はSD136下層出土の景德鎮青花皿E群である。内底に团龍文を描く。45はSK121出土の景德鎮青花皿E群である。46はSK125出土の華南産青花高台付皿である。外底を露胎とし、内底の釉を輪状に搔き取る。47はSK112出土の土師器の脚付皿である。48はSK129出土の備前焼擂鉢である。

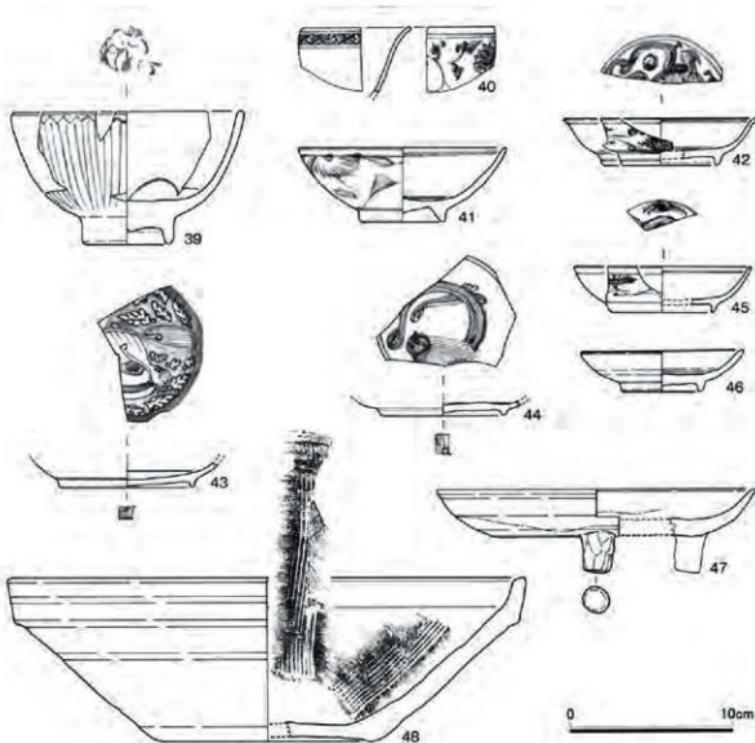


Fig.20 第1面遺構出土遺物実測図 (1/3)

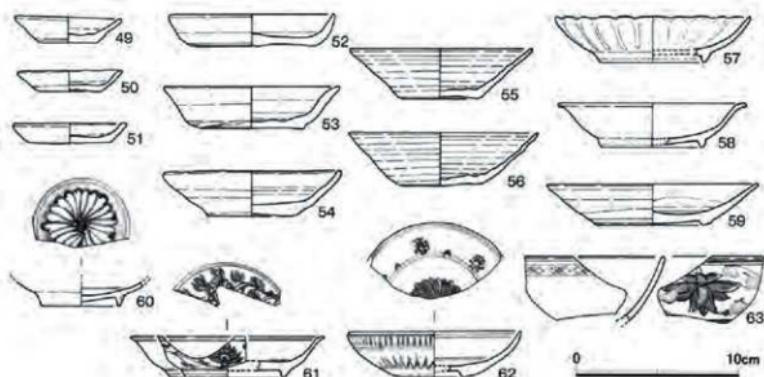


Fig.21 第1面出土遺物実測図 (1/3)

Fig.21は第1面の造構検出時や掘り込みを伴わず出土した遺物である。49～51は土師器の小皿、52～56は土師器の壊である。55・56はI-5グリッドから2枚重ねで出土したろくろ目を強く残す薄手の土師器壊。赤橙色を呈する。57は景德鎮の青磁菊皿。58は景德鎮の白磁皿E-2b類。59は福建省産の体部に釉を回し掛けし、内底と体部下半から外底を露胎とする白磁皿である。60～62は景德鎮青花。60は碗C群、61は皿B-1群、62は皿C群である。63は景德鎮の色絵の碗である。赤、黄、緑の絵付けがなされる。

Fig.22は第2面への掘り下げ時に出土した遺物である。66～79は土師器の小皿。80は高台付の土師器の小皿。81～89は土師器の壊。88・89はろくろ目を残し、白橙色を呈する大内系の土師器である。90は土師器の脚。上部の形状は不明。91は龍泉窯系青磁碗。外面にヘラ描き文、内底に草花文の印画がある。外底は露胎で、墨書がある。92・93は景德鎮の白磁の菊皿。やや青みがかった釉が掛かる。外底は露胎で橙色を呈する。94・95は景德鎮の白磁。94は壊E-2類、95は皿E-2b類である。96は中国華南産青花碗である。内底の釉を搔き取る。97は景德鎮の青花皿E群。98は中国華南産の青花大皿。外底は露胎である。99は備前焼鉢。



Ph.10 I-5グリッド遺物出土状況（西から）

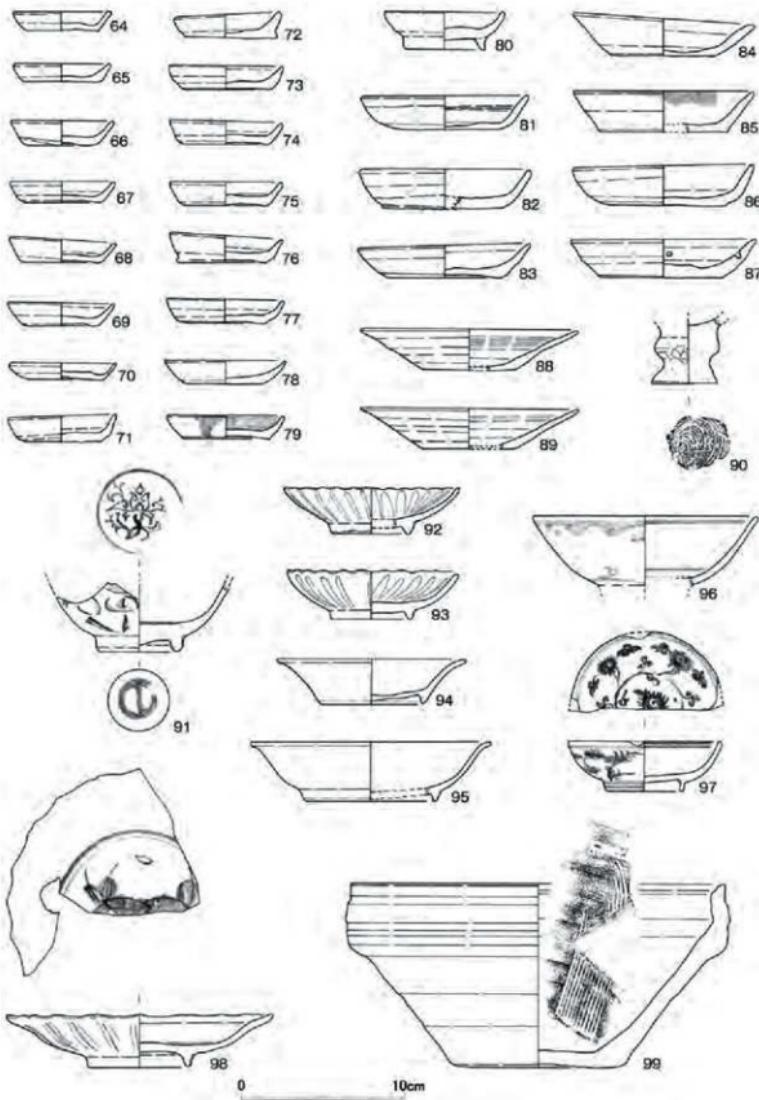


Fig.22 第1面下出土遺物実測図 (1/3)

4. 第2面の遺構と遺物

第2面は第1面から30~40cm下げたところに設定した。調査区東際の道路の整地層はまだ残っている。標高は1.9m~2.1mである。西側では石列や石組井戸などが発見された。16世紀代の遺構である。



Ph.11 第2面北東側全景（西から）



Ph.12 第2面西側全景（西から）

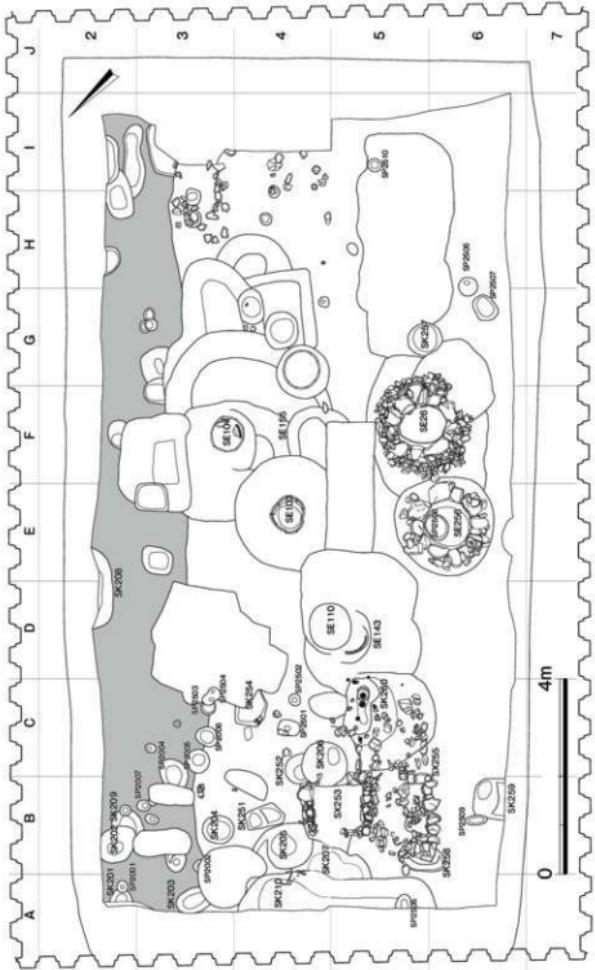


Fig.23 第2面遺構分布図（1/100）

SK 204 (Fig.24・25)

B-3に位置する小型の円形土坑。長軸0.7m、短軸0.6m、深さ30cmである。

出土遺物をFig.25に示す。100は土師器の小皿。灯明皿として使用されている。101は土師質の小壺。外面とも粗いハケ調整がなされる。

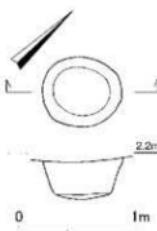


Fig.24 SK 204
実測図 (1/40)

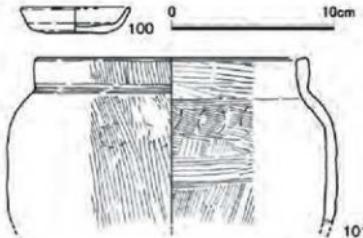
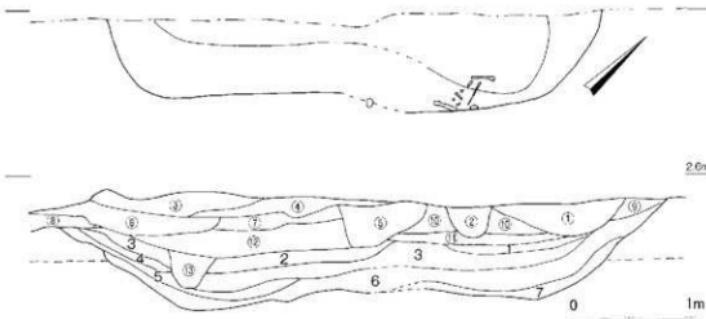


Fig.25 SK 204 出土遺物実測図 (1/3)

SK 210 (Fig.26・27)

A-4～6に位置する楕円形土坑。北側は調査区外に延びる。東と西で2回に分けて掘ったのでやや整合しない。第2面検出面での規模は長軸4.0m、深さ40cmであるが、調査区北壁の土層から長軸4.9m、深さ60cm程度ある。

出土遺物をFig.27に示す。102・103は土師器の小皿。104は土師器の壺。105～108は景德鎮の青花碗。109はC、106はD、107・108はE群である。109・110は中国華南の青花碗で外底は露胎。109は内底も露胎である。111・112は景德鎮の青花皿。111は葵筋底で口縁は外反する。112はE群。呉須の発色が悪く黒味がかる。16世紀後半の遺構である。



- | | | |
|----------------------|-------------------|----------------------|
| ① 淡褐色泥砂土 売化物含む | ⑥ 底褐色泥砂土 | 1. 淡灰褐色泥砂土 |
| ② 淡褐色泥砂土 売化物含む | ⑦ 底褐色泥砂土 | 2. 黄褐色泥砂土 |
| ③ 黄褐色砂 | ⑧ 底褐色土と黄色砂の互層 | 3. 底黑色土 売化物含む |
| ④ 底褐色砂質土 黄褐色粘土 売化物含む | ⑨ 底褐色土 売化物含む | 4. 底黄褐色粘土 灰黑色土含む |
| ⑤ 淡褐色泥砂土 売化物含む | ⑩ 底褐色泥砂土 | 5. 茶褐色粘土 |
| ⑥ 底褐色泥砂土 | 灰化物 黄褐色砂 粘土に含む | 6. 淡灰褐色泥砂粘土 灰土 売化物含む |
| 黄褐色粘土ブロック 売化物含む | ⑪ 底褐色泥砂土 (SP2505) | 7. 底褐色粘土 売化物含む |
| ⑦ 黄褐色砂 | | |

Fig.26 SK 210 実測図 (1/40)

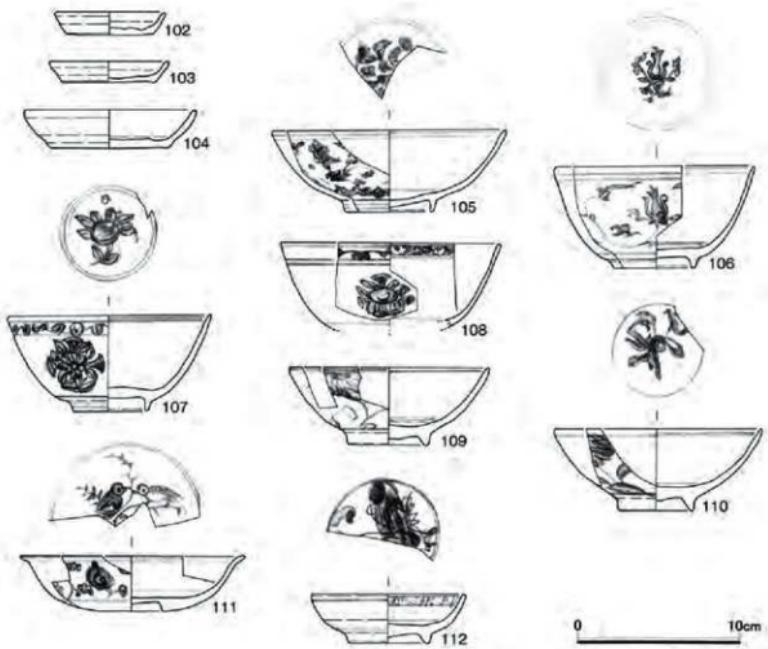


Fig.27 SK 210出土遺物実測図 (1/3)

S X 2 5 3 (Fig.28、Ph.13)

B - 4・5に位置する石組土坑である。残りは悪い。南北の内法0.9m、東西の内法が1.0mである。



Ph.13 SX 253検出状況（南から）

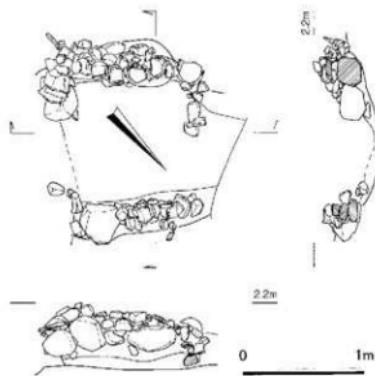


Fig.28 SX 253実測図 (1/40)

S X 2 5 5 (Fig.29 · Ph.14)

B · C - 5 · 6 に位置する石列遺構。南北に延び、南側で西に直角に折れる。南側1.7mとその北側は石の大きさや石組の構造が異なるため別遺構となるかもしれない。別遺構であれば南側は南北の内法1.1mの石組土坑であろうか。

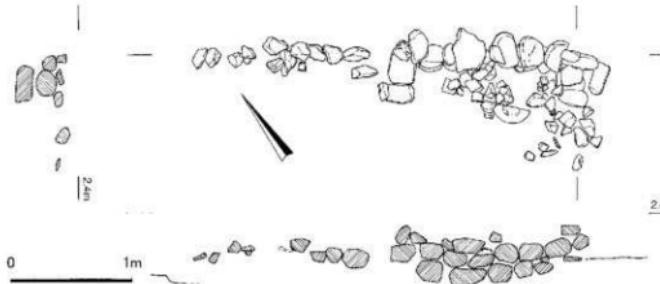


Fig.29 S X 2 5 5 実測図 (1/40)



Ph.14 S X 2 5 5 検出状況 (南から)

S E 2 5 6 (Fig.30 · 31, Ph.15)

E - 5 · 6 に位置する石組井戸である。掘り方径は2.1m。標高1.2mで平坦面をつくり、その上に石を積んでいる。標高1.2m以下は素掘りである。

出土遺物をFig.31に示す。113は龍泉窯系青磁碗で外面に細蓮弁を施すB - IV類。内底にヘラ描きと印花文を施す。外底は蛇の目に軸を搔き取る。114は龍泉窯系青磁の稜花皿。体部内面にヘラ描きを施す。115は景德鎮の青磁菊皿である。外底には透明釉をかける。116は景德鎮の白磁皿E - 2 b類。117は景德鎮の青花碗。118は景德鎮の青花皿C群。119は朝鮮王朝灰青陶器の碗。

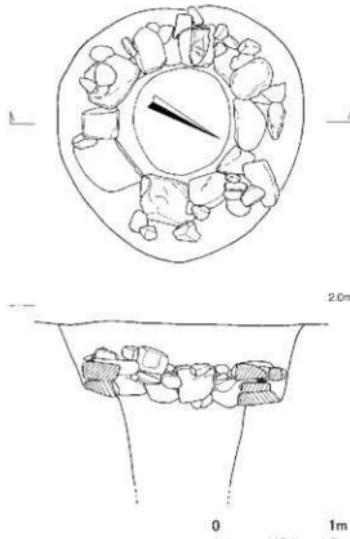


Fig.30 S E 2 5 6 実測図 (1/40)

120は瓦質の擂鉢である。底部と体部内面に放射状の摺目が入る。体部外面は横方向のケズリ調整。

出土した遺物から16世紀後半の井戸と考えられる。



Ph.15 SE 256検出状況（東から）

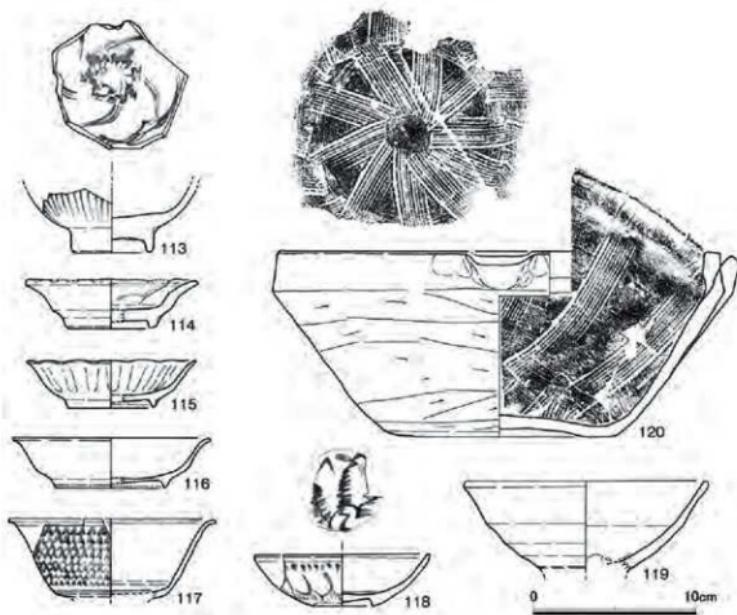


Fig.31 SE 256出土遺物実測図（1/3）

SK 260 (Fig.32・33)

C-5に位置する楕円形土坑。東側調査区ではプランを確認できなかった。南側は1面の近世井戸群に切られる。推定短軸方向2.1m、長軸方向1.8m残存する。深さは11m。土坑内には杭や木柱があり、南側の木柱には礎板石が据えられている。また、北側にはピット状の掘り込みがあり、ここにも木柱があった可能性がある。

出土遺物をFig.33に示す。121～122は土器の小皿。121は燈明皿として利用されている。123は土器器の坏。底部に長方形の穿孔がなされる。124は景德鎮の白磁の菊皿。やや青みがかった釉が掛かる。外底は露胎で橙色を呈する。125は瓦質の風炉。126は瓦質の土製品で寄棟の屋根形を呈する。蓋であろうか。外面は平滑にミガキ調整される。頂部には両側から穿孔がある。

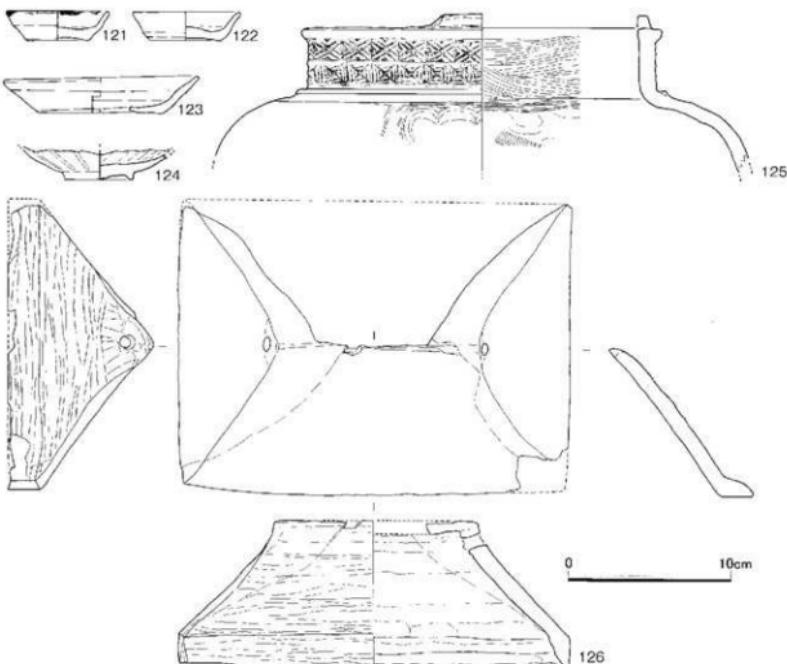
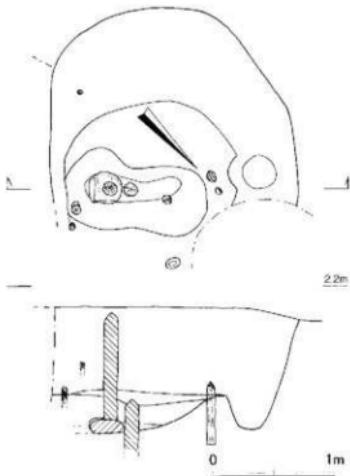


Fig.33 SK 260 出土遺物実測図 (1/3)

S E 2 6 1 (Fig.34・35, Ph.16・17)

E～G-5・6に位置する石組井戸。SK140・S E 2 5 6に切られる。掘方は長径3.2m、短径2.5mである。水溜は径90cm、高さ35cmの木桶を据える。

出土遺物をFig.35に示す。129～131は掘方出土。127は土師器の小皿で燈明皿として利用されている。128は土師器の壺である。129～131は龍泉窯系青磁碗B～IV類である。外面にヘラ描きで細蓮弁を施す。131の内底には草花文の印花が押される。高台内面途中まで釉がかかる。132は木瓜形の龍泉窯系青磁皿。内面には印花で草花文を陽刻する。133は景德鎮の青花皿C群。134は朝鮮王朝の灰青陶器皿。砂目が4か所ある。135・136は備前焼の擂鉢。

出土した遺物から16世紀前半の井戸と考えられる。

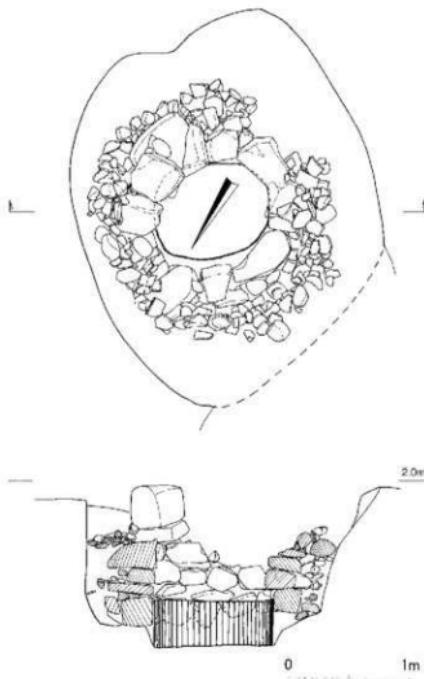


Fig.34 S E 2 6 1 実測図 (1/40)



Ph.16 S E 2 6 1 検出状況 (西から)



Ph.17 S E 2 6 1 水溜検出状況 (西から)

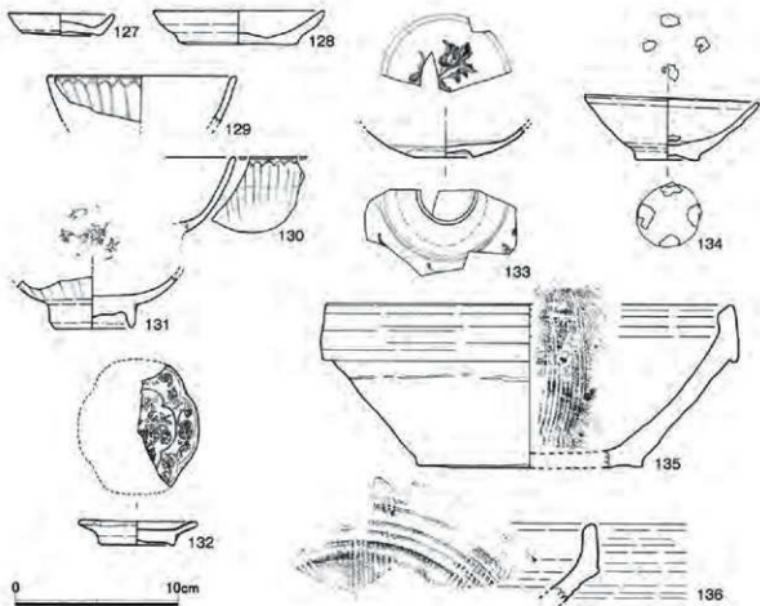


Fig.35 S E 26 1出土遺物実測図 (1/3)

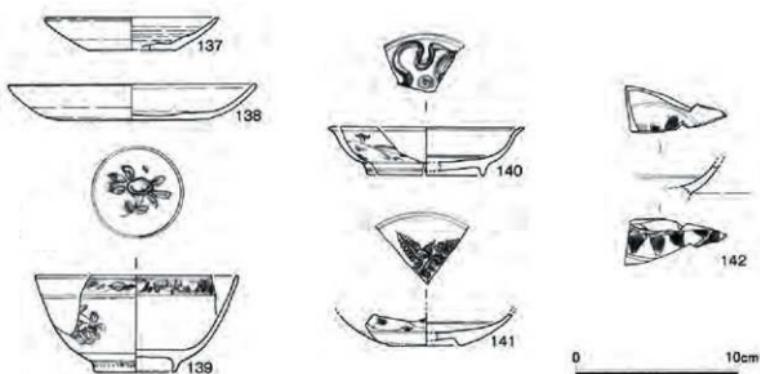


Fig.36 第2面造構出土遺物実測図 (1/3)

第2面その他の遺物 (Fig.36・37)

Fig.36はこれまで取り上げなかった第2面遺構の出土遺物である。137・138はS P 2 0 0 5出土の土師器の壊。138は大型で、底部は糸切りの後、ハケ調整される。139～141は景德鎮の青花。139は碗E群、SK 2 0 2、140は皿B-2群、S P 2 5 0 1、141は皿C群、SK 2 0 6出土。142は景德鎮の色絵の碗。赤、黄、緑の絵付けがなされる。63と同一個体か。SK 2 0 5出土。

Fig.37は第3面への掘り下げ時に出土した遺物である。143～152は土師器の小皿。148・150は燈明皿として利用されている。153～157は土師器の壊。158は龍泉窯系青磁の稜花皿。内底と外底は露胎。体部内面にヘラ描き、内底に草花文の印花を施す。159は景德鎮の白磁皿E-2b類。160は白磁の稜花皿。外底露胎。焼きが悪く赤橙色を呈する。161・162は景德鎮青花碗。161はD群、162はB-2群。163は中国華南産の青花皿。内外底露胎。164・165は朝鮮王朝陶器。164は青灰陶器皿、165は刷毛粉青沙器碗。166は瓦質の火鉢である。

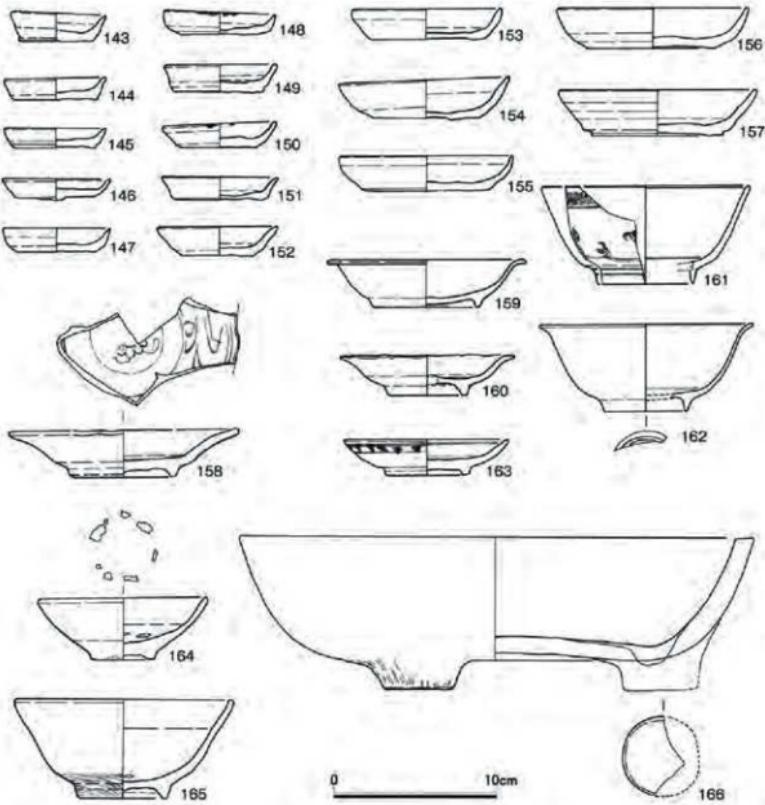


Fig.37 第2面下出土遺物実測図 (1/3)

5. 第3面の遺構と遺物

第3面は第2面から20~30cm下がた標高は1.7m~1.8mに設定した。調査区東際の道路の整地層下の暗黒褐色土になる。

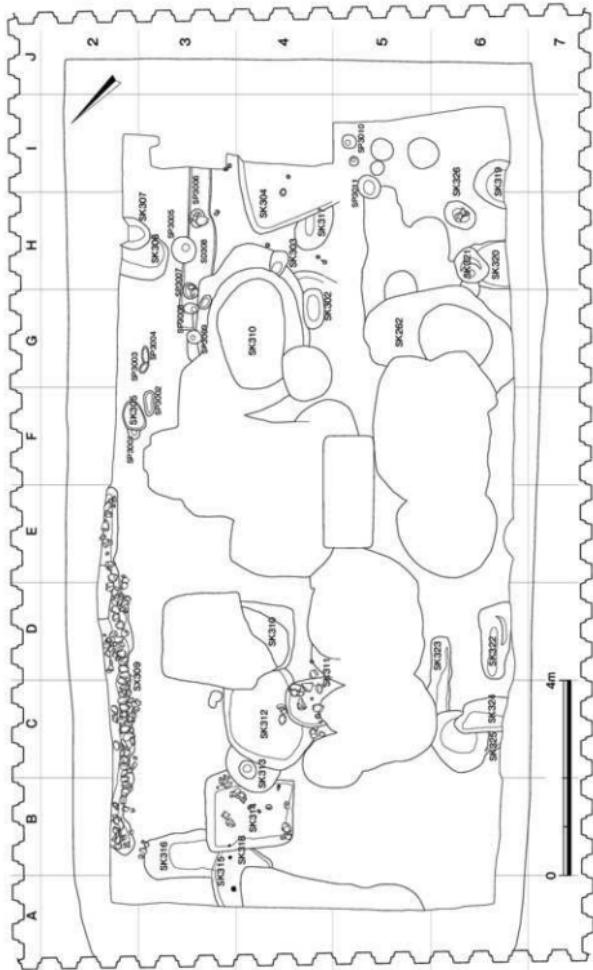


Ph.18 第3面東側全景（西から）



Ph.19 第3面西側全景（西から）

Fig.38 第3面遺構分布図 (1/100)



SK 301 (Fig.39・40)

F～H-3・4に位置する
楕円形土坑である。残存
部の長径2.9m、短径2.0m、
深さ90cmである。第1面
の深い遺構であるSK128
～131に切られる。

出土遺物をFig.40に示す。
167・168は土師器
小皿、169～171は土師
器の坏である。172は朝
鮮王朝の印花粉青沙器の
皿。173は備前焼擂鉢。
174は瓦質の火鉢である。

出土した遺物から16世紀
の遺構と考えられる。

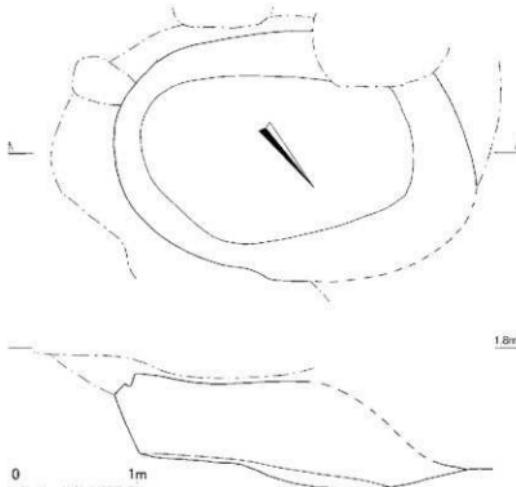


Fig.39 SK 301 実測図 (1/40)

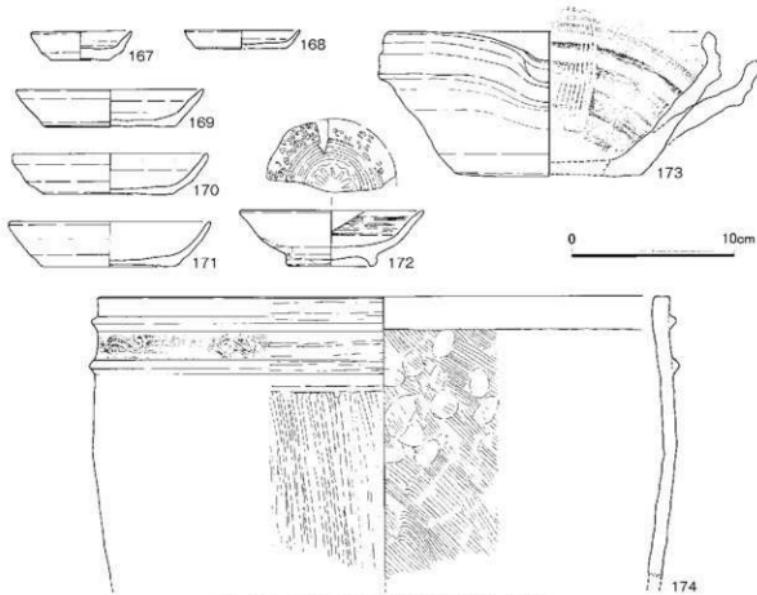


Fig.40 SK 301 出土遺物実測図 (1/3)

SK304 (Fig.41・42)

H・I-4・5に位置する方形土坑。残存部は東西0.6m、南北0.7m、深さ15cmである。東側は調査区外に延び、南側は西側調査時に確認できなかった。

出土遺物をFig.40に示す。175は土師器小皿、176は土師器の壺である。177は土師器の蓋である。

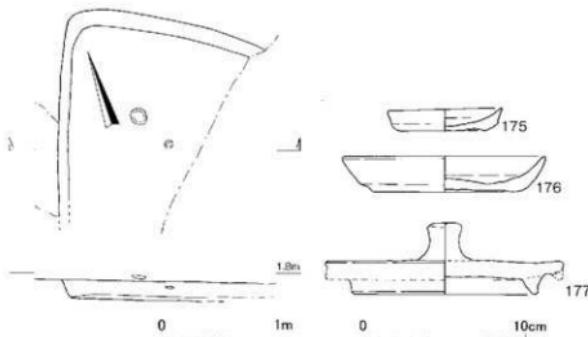


Fig.41 SK304
実測図 (1/40)

Fig.42 SK304
出土遺物実測図 (1/3)

SX309 (Fig.43, Ph.20)

B～E-2の東壁際に位置し、南へさらに延びると思われる南北方向の石列である。7.5m確認された。現在の町割りとほぼ同じ方位である。



Ph.20 SX309検出状況 (南から)

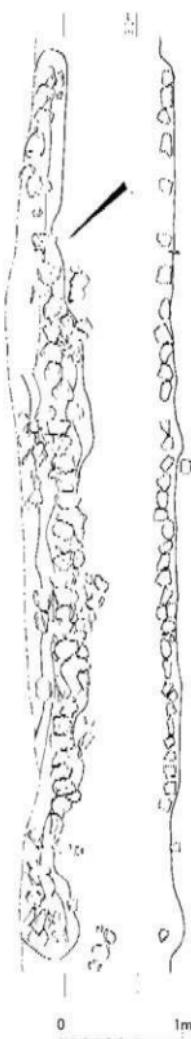


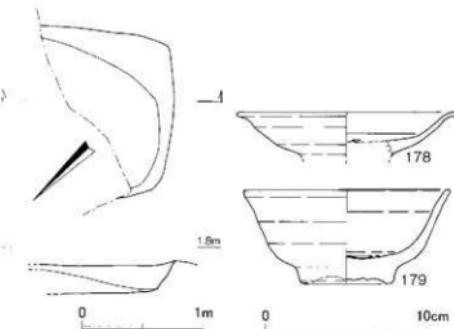
Fig.43 SX309
実測図 (1/40)

SK 310 (Fig.44・45)

D - 4 に位置する土坑である。
残存部の径13m、深さ25cm。搅乱により北側は失われている。

出土遺物を Fig.40 に示す。178
は朝鮮王朝の硬質白磁の皿。釉色
は青白色を帯び、目跡は胎土目で
ある。179は朝鮮王朝の軟質白
磁の碗。目跡は砂目である。

出土した遺物から16世紀後半の
遺構と考えられる。



SK 311 (Fig.46・47)

C - 4 に位置する円形の土坑。
直径10m、深さ30cmである。西
側の調査区ではプランを確認でき
なかった。やや大きめの砾が投棄されている。

出土遺物を Fig.40 に示す。180・181は土師器の小皿、182・
183は土師器の壺である。182の内面は全面に煤が厚く付着して
いる。183是中国華南産の青花碗。内底露胎で、青白色的釉は高
台脇までかかる。184は土師質の脚鍋。口縁は内側に逆し字状に
折れ、上部はナデで平坦にする。口縁下に突帯を巡らし、ハケ状工
具で斜めに刺突する。口縁から突帯までは縱方向のハケメを施し、
突帯以下はハケメをナデ消している。底部は同心円状に横方向のハ
ケメを施す。脚部は欠損する。

出土した遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

Fig.44 SK 310
実測図 (1/40)

Fig.45 SK 310
出土遺物実測図 (1/3)

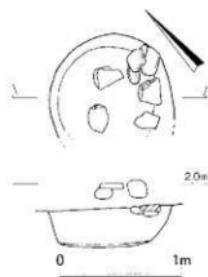


Fig.46 SK 311
実測図 (1/40)

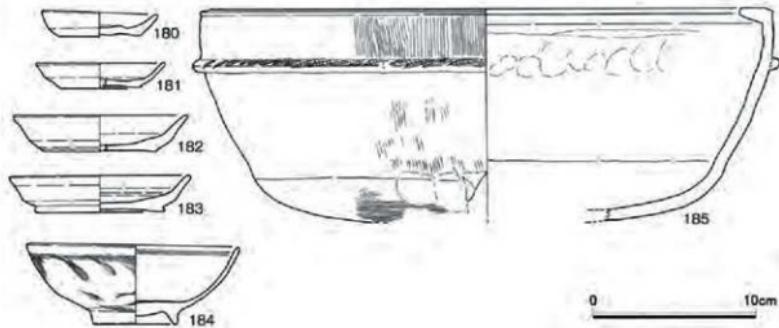


Fig.47 SK 311 出土遺物実測図 (1/3)

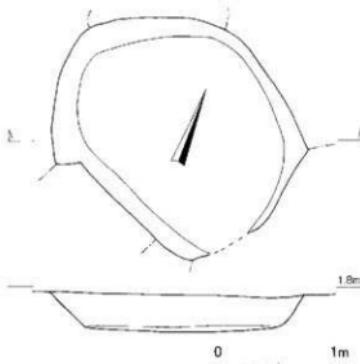


Fig.48 SK 312実測図 (1/40)

SK 312 (Fig.48・49)

C・D-3・4に位置する梢円形土坑。南側を搅乱で失い、東側をSK 311に切られる。残存部の長径2.1m、短径1.7m、深さ30cm。

出土遺物をFig.49に示す。186・187は土師器の小皿、188は土師器の壊である。

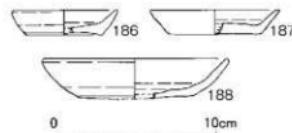


Fig.49 SK 312出土遺物実測図 (1/3)



Ph.21 SK 314検出状況 (西から)

SK 314 (Fig.50・51, Ph.21)

B・C-3・4に位置する長方形土坑。南側をSK 313に切られる。長軸1.8m、短軸1.6m、深さ25cm。壁際には杭と横板の痕跡が残る。

出土遺物をFig.51に示す。189・190は土師器の小皿で燈明皿として使用される。191は米色を呈する龍泉窯系青磁碗B-IV類である。外面にヘラ描きで細蓮弁を施す。内底には花文の印花が押される。高台内面途中まで釉がかかる。192は景德鎮の青磁輪花皿。193は景德鎮青花碗C群である。

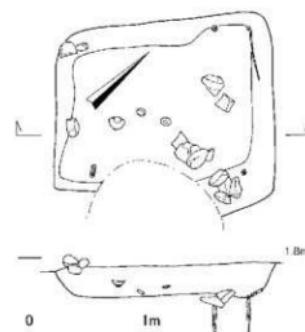


Fig.50 SK 314実測図 (1/40)

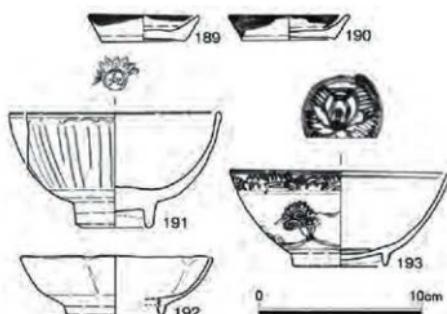


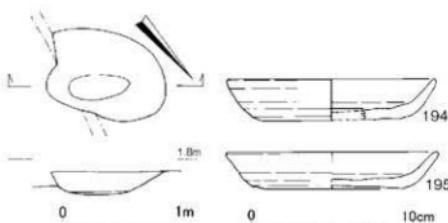
Fig.51 SK 314出土遺物実測図 (1/3)

SK 317 (Fig.52・53)

H - 4 に位置する梢円形土坑。東側を SK 304 に切られる。残存部の長径1.0m、短径0.7m、深さ20cm。

出土遺物を Fig.53 に示す。

194・195は土師器の壺である。



SK 319 (Fig.54・55)

H - I - 6 に位置する円形土坑。西側は調査区外に延びる。直径1.0m、深さ30cm。

出土遺物を Fig.55 に示す。

196～199は土師器の小皿である。197は燈明皿として使用される。200・201は土師器の壺。

SK 322 (Fig.56・57)

D - 6 に位置する土坑。長軸1.6m、短軸0.7m、深さ40cm。

出土遺物を Fig.55 に示す。

202～204は土師器の小皿である。205は龍泉窯系青磁碗 B - IV 類である。外面にヘラ彫きで細蓮弁を施す。

第3面その他の遺物 (Fig.58)

Fig.58は第4面への掘り下げ時に出土した遺物である。206～221は土師器の小皿。207～210は燈明皿として利用されている。222～243は土師器の壺。224・230・236・243は燈明皿として利用されている。244は龍泉窯系青磁碗。高台外面まで釉がかかっている。245・246は龍泉窯系青磁の鉢。外面は縦方向のヘラ彫り、内面は印花による陽刻の草花文を施す。同一個体か。247は口禿の白磁皿。248は福建省邵武窯の白磁皿D群。内底の釉を輪状に掻き取る。249は備前焼擂鉢。

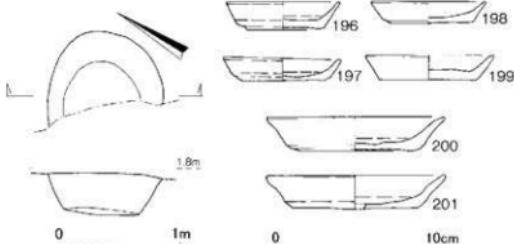


Fig.54 SK 319 実測図 (1/40)
Fig.55 SK 319 出土遺物実測図 (1/3)

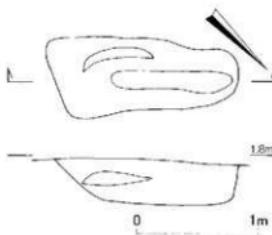


Fig.56 SK 322 実測図 (1/40)

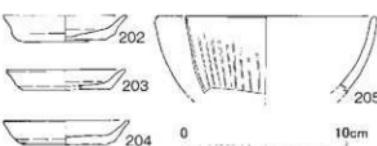


Fig.57 SK 322 出土遺物実測図 (1/3)

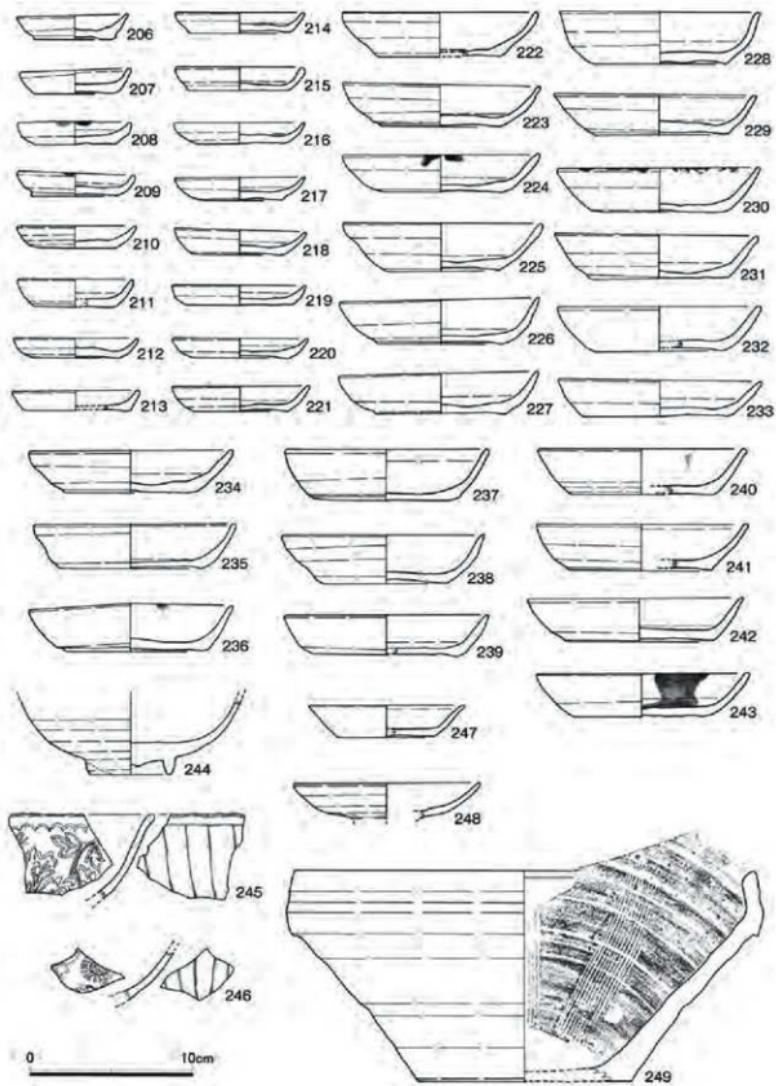


Fig.58 第3面下出土遺物実測図 (1/3)

6. 第4面の遺構と遺物

第4面は第3面から暗黒褐色土を除去し、自然堆積の面が露出した標高1.1m～1.3mに設定した。北側に緩やかに傾斜する。第4面の直上からは割れた土師器の壺・小皿が多量出土している。

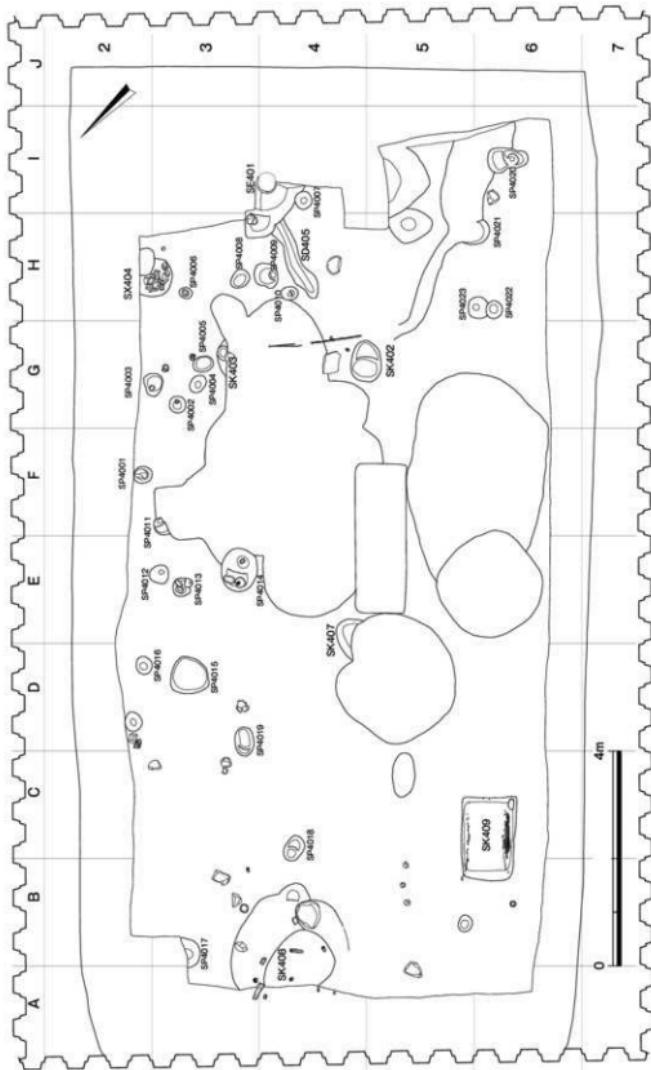


Ph.22 第4面南東側全景（西から）



Ph.23 第4面西側全景（西から）

Fig.59 第4面遺構分布図 (1/100)



**SE 401 (Fig.60・
61、Ph.24)**

H・I-3・4に位置する井戸である。調査区際であつたため、十分な記録が取れなかつた。井側は曲物を何段か積んでおり、ずれないので外側に杭を打っている。

出土遺物をFig.61に示す。250は土師器の壺である。

SK 402 (Fig.62・63)

G-4・5に位置する楕円形土坑。西側の調査区では確認できなかつた。

長軸は0.8m、深さは北側が深く40cm、南側で20cm。

出土遺物をFig.63に示す。251は土師器の小皿である。252・253は土師器の壺である。

SK 409 (Fig.64、Ph.25)

B・C-5・6に位置する長方形土坑。長辺1.6m、短辺1.0m、深さ5cm。長

辺に竹を打ち込む。やや太い竹は半裁して、竹の内側を土坑の内側に向けて打ち込んでいる。西辺の竹は10cm、東辺の竹は15cmほど残存する。西側の辺には横木の痕跡もある。

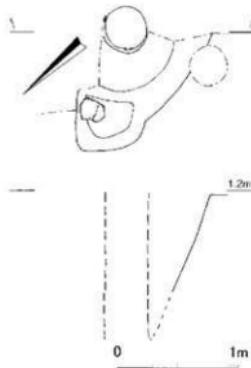


Fig.60 SE 401
実測図 (1/40)



Ph.24 SE 401 検出状況 (北から)

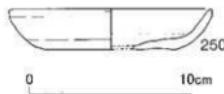


Fig.61 SE 401
出土遺物実測図 (1/3)

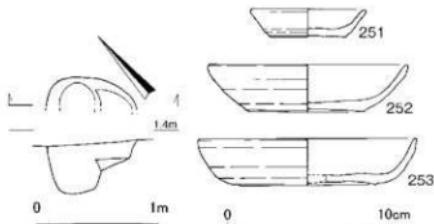


Fig.62 SK 402
実測図 (1/40)

Fig.63 SK 402
出土遺物実測図 (1/3)



Ph.25 SK 409 検出状況 (北から)

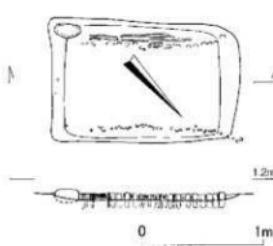


Fig.64 SK 409 実測図 (1/40)

第4面その他の遺物 (Fig.65~67)

Fig.65は第4面の遺構検出時や掘り込みを伴わず出土した遺物である。254~260は土師器の小皿、261~269は土師器の坏である。266は燈明皿として利用されている。270は茶入れである。赤褐色の夾杂物のない細かい胎土に黒褐色の釉がかかる。261がH-5、263がI-6で出土した以外はI-5グリッドから出土した。

Fig.66は4面下の自然堆積層から出土した遺物である。271~277は土師器の坏である。すべてG-4グリッド出土。278は瓦質の鉢である。体部内面にハケ調整が明瞭に残る。

Fig.67は東壁土層図作成のために入れたトレンチより出土したもので、自然堆積層から出土した4面下の遺物である。自然堆積層はおむね上から砂質土、砂層、粘土層となっており、279~284が砂質土、285~287が砂層、288~300が粘土層からの出土である。279~281・288~290が土師器の小皿、それ以外は土師器の坏である。293は燈明皿として利用されている。

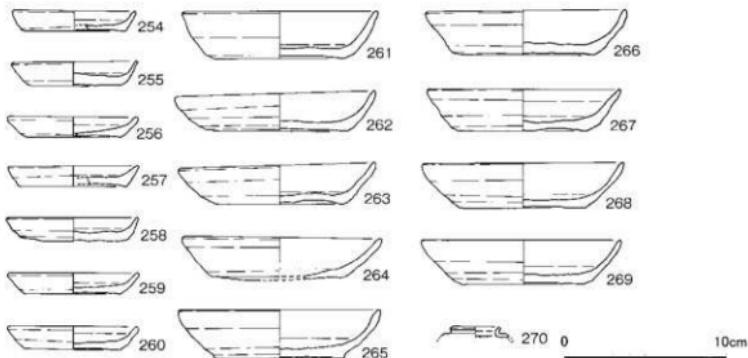


Fig.65 第4面出土遺物実測図 (1/3)

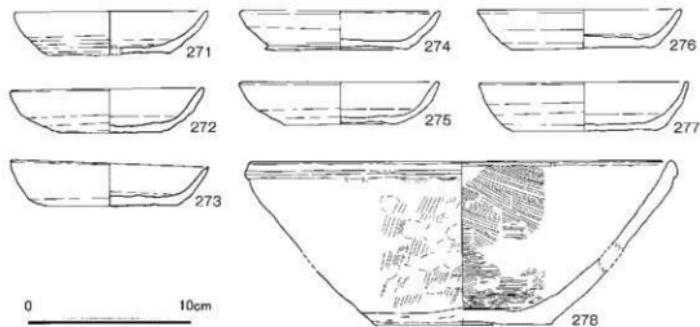


Fig.66 第4面下出土遺物実測図 (1/3)

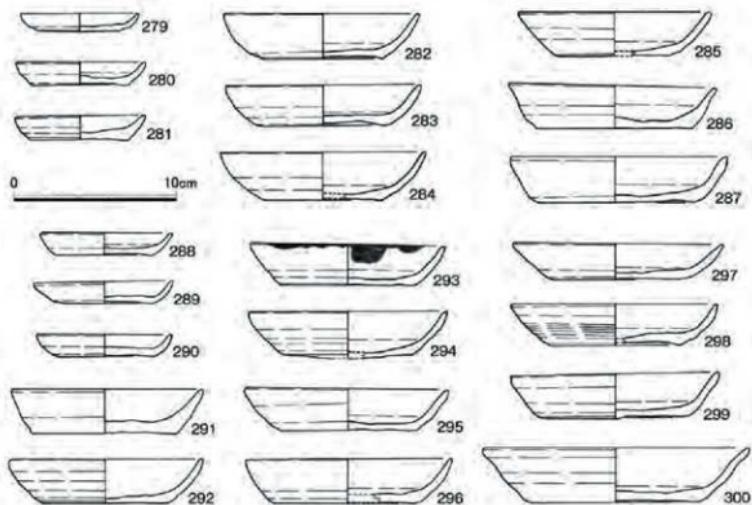


Fig.67 東壁土層トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

7. その他の出土遺物

最後にこれまで紹介できなかった遺物を報告する。

陶磁器 (Fig.68)

301は福建省邵武窯の白磁皿D群。体部下半から外底露胎。外底に墨書がある。発掘区西壁出土。
 302は朝鮮王朝硬質白磁の皿。青白色の釉がかかる。高台内側は露胎。試掘トレンチ出土。
 303はベトナム鉄絵の碗。印版で文様を入れる。釉下に化粧土が認められる。内底と体部下半から外底は露胎。試掘トレンチ出土。

土製品 (Fig.69)

304~309は土錘。304は発掘区東壁、305はSK301、
 306・307はSK128、308・309は2面下出土。310
 は紡錘車。SK301出土。311は玉。SK301出土。

石製品 (Fig.70)

312は硯。2面下出土。313は石錘。SK130出土。
 314は茶臼の下臼。1面下出土。315は五輪塔の火輪。S
 K255出土。316は一石五輪塔の風輪、火輪、水輪部。
 2面C-5出土。

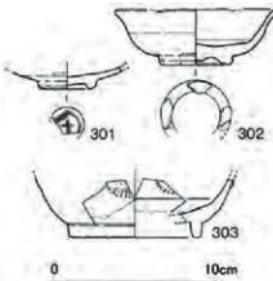


Fig.68 その他の陶磁器実測図 (1/3)

金属製品 (Fig.71)

317~319は目貫。320は飾金具。321は耳かき。322は火箸。317・319・321は一面下、318は1面、320はSE104、322は2面下出土。すべて青銅製。

ガラス製品 (Fig.72)

323・324はおはじき。白色を呈しており碁石か。
323はSK301、324はSK130出土。325は透明な玉。
SK128出土。326~328は小玉。326は不透明な青色を呈する。SE103出土。327も不透明な青色を呈する。2面下出土。328は透明な紺色を呈する。
SK260出土。

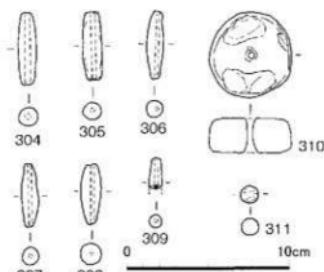


Fig.69 土製品実測図 (1/3)

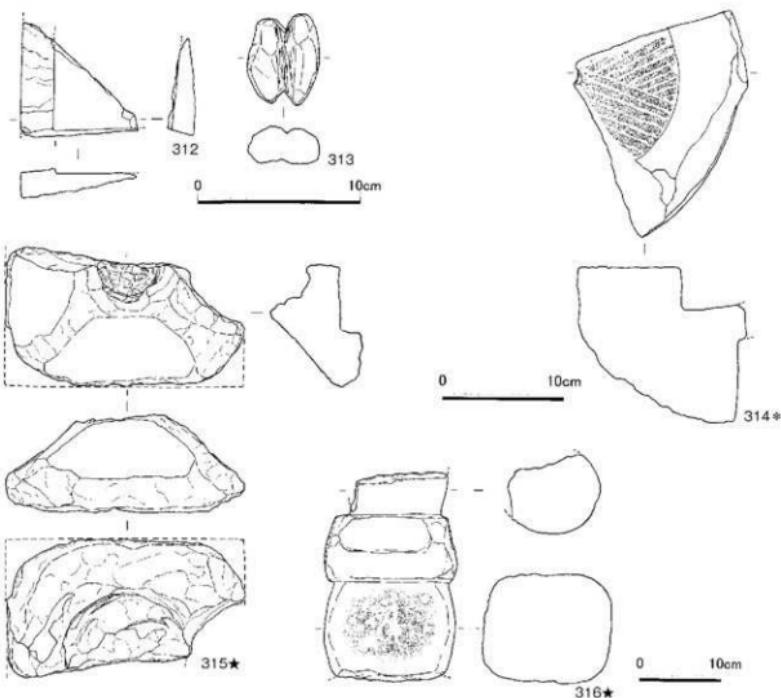


Fig.70 石製品実測図 (1/3 · 1/4 * · 1/6 ★)

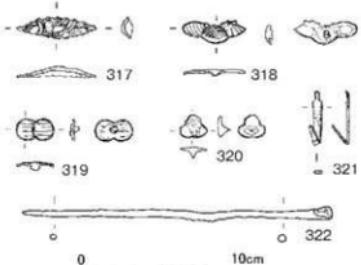


Fig.71 金属製品実測図 (1/3)

錢貨 (Fig.73)

中世の出土銭は27点である。残りの良いものをFig.73に拓影を示す。329は唐の開元通寶である。3面下出土。330～341は北宋銭である。330は祥符元寶。SK 3 0 3出土。331・332は祥符通寶。331はSE 2 6 1、332は發掘区東壁出土。333は嘉祐通寶。第4面出土。334～336は熙寧元寶。334はSE 1 0 4、335は第1面、336は2面下出土。337～339は元豐通寶。第37はSK 2 1 0、338は第1面出土。339は排土採集。340は元符通寶。SK 1 2 8出土。341は大觀通寶。1面下出土。342は南宋の咸淳通寶。背に元。3面下出土。343は明の洪武通寶。第1面出土。

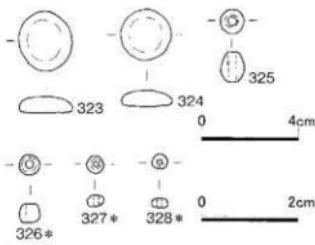


Fig.72 ガラス製品実測図 (1/2 · 1/1*)

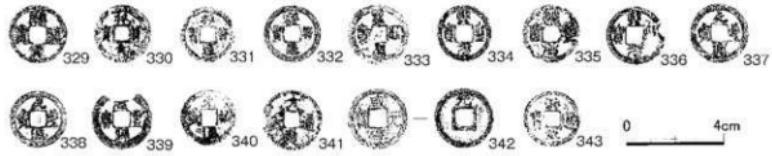


Fig.73 出土銭拓影 (1/2)

III まとめ

今回の調査で得られた成果を簡単にまとめておく。211次調査地点は博多浜北西部に位置する。砂丘砂層は存在せず、海成砂の上に南からの自然堆積層がある。出土遺物はほとんど土器の壺と小皿であり、編年が確立されていないため不確かだが15世紀代の堆積であろう。その後、暗黒褐色土で埋め立て、16世紀から生活が始まる。南側の159次調査では14世紀代にさかのばる遺構が少しあるが、15世紀後半から井戸がつくられはじめ生活域となったようである。この時期からさらに北側へ埋め立てを開始したのである。

方形の遺構や石組の方向などから町割りの方向は現在の町割りとほぼ同じとみられる。周辺の159次や124次調査も同様であり、ある程度の広がりで15世紀以降同一方向の町割りがなされている。

調査区東際で道路とみられる整地を確認した。16世紀後半に利用されたものであろう。この縦筋道路は初めての発見である。南側の159次調査でも16世紀前半代の同一方向の道路が見つかっているが、211次の道路延長線より西にある。時間がやや異なるためか、現況道路下に横筋道路がありそこにぶつかり筋をえているのか、今後延長部や接続部が見つかることを期待する。

報告書抄録

ふりがな	はかた 167							
書名	博多 167							
副書名	博多遺跡群第211次調査報告							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1396							
編著者名	田上勇一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	西暦 2020年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
はかた じいせき ぐん 博多遺跡群	ふくおかふくおかし 福岡県福岡市 はかた くじらやまち 博多区店屋町	40132	0121	33° 35' 46"	130° 24' 33"	20170403 ~ 20170630	174	ホテル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
博多遺跡群	集落	中世	井戸・土坑・溝・ 石組土坑・石列・ ピット	中国産青磁・白磁・青花・陶器 朝鮮王朝産粉青沙器・白磁・陶器 ベトナム産陶器・国産土器・陶器 石製品・金属製品・ガラス製品・錢貨				
要約	調査地点は博多浜北西部に位置する。調査により16世紀には埋め立てにより生活域となつたことが判明した。16世紀後半には南北方向の道路が通されている。道路や石列、方形の土坑などから、中世末の町割りは現在の町割りとはほぼ同じであることが判明した。また、備前焼の大甕を3個体据えた遺構が発見された。							

博多 167

— 博多遺跡群第211次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1396集

2020年3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 株式会社 博巧印刷
福岡市南区那の川一丁目9-7

HAKATA 167

— Results of the 211th excavation of the Hakata sites —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1396



2020

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY